

審査の結果の要旨

氏名 瀬尾 美紀子

本論文は、学習面のつまずきへの対処法の1つである「学習上の援助要請」に対する影響要因を、学習者のもつ学習方略と援助者の指導スタイルの両側面から明らかにすることを目的とするものである。

はじめに先行研究を批判的に検討した。第1章では、援助要請の生起・回避プロセスに関しては、動機づけと援助要請に対する認知（有効性・脅威）を組み合わせたモデルによる説明を試みたものが多いが、これらの研究では一貫した結果が得られていないという問題点を指摘した。第2章では、援助要請のスタイルが、自律的援助要請と依存的援助要請の2種類に概念的に分類されることを示した上で、従来の研究では依存的援助要請を引き起こす要因の検討が十分に行われていないことを指摘した。以上を受けて、第3章では、第1に、学習方略の側面、特につまずきを把握するためのメタ認知的スキルの使用という視点から検討する必要性を示し、第2に、援助要請スタイルについては、要請者と援助者の相互作用から形成されるという視点に立って検討する重要性を述べている。

第4章（研究1）では、数学の援助要請の生起・回避にメタ認知的スキルがどのように関連しているかを、質問紙調査によって検討した。先行研究で影響が示されてきた援助要請に対する有効性の認知や脅威の認知よりも、数学のつまずきを把握するためのメタ認知的スキルである「つまずき明確化方略」の方が援助要請に関連していることが示された。

第5章と第6章では、援助要請スタイルに関する影響要因について検討している。第5章（研究2）では、質問紙調査によって、依存的要請スタイルに対する影響要因が中学生と高校生とで異なることを明らかにした。具体的には、中学生では結果を重視し丸暗記に頼ろうとする学習観（丸暗記・結果重視志向）が影響を与えるのに対して、高校生ではつまずき明確化方略の使用が少ないと依存的援助要請の傾向が強くなることが示された。

第6章（研究3）では、援助者である教師の指導スタイルおよびサポート的態度が援助要請スタイルとどのように関連しているかを質問紙調査によって検討し、教師が主導的な指導スタイルであるほど依存的な援助要請になることが示された。一方、サポート的態度が必ずしも援助要請の生起を促すわけではないことも明らかになった。

第7章（研究4）では、つまずき明確化方略の指導が援助要請の第1段階である質問生成の促進に対してどのような効果を示すか、実験授業を行って検討し、質問生成量と質問内容の両方に影響を及ぼすことが明らかになった。特に、質問内容について、数学の学力差に関係なくつまずき明確化方略の指導効果が見られた。最後の第8章では、研究結果を整理し、本論文の結論を述べるとともに、援助要請回避と依存的援助要請への対処、さらに自律的援助要請を促進するための教育実践的示唆をまとめた。

このように、本論文は、これまで動機づけの観点から検討されることが多かった学習上の援助要請の影響要因について、つまずき明確化方略の役割、生徒のもつ学習観、そして教師の指導スタイル等の影響を明らかにしたもので、教育心理学上の貢献とともに、教育実践に対しても具体的な示唆をもたらす研究といえる。よって、博士（教育学）の学位にふさわしい論文であると評価された。